



谷實集



良久先生肖像



良久先生



六月十日

秋の古き旅の舟をめぐりて

毛筆の駒のあしを如くし只を如く良久居士乃一
園忘る方かぬ方ふ親族知人言らるるとい散り経
をたむりて心ゆくを如く霊位を慰まめかつる
生前の遺字紙梅木よりありとありて不朽小
傳へてはわきを舊交の因に如く播つたなき
辞をやりおる字如居士姓ハ伊東通稱傳之部
良久居士猶其家を花実惠といふ又ある宛
と稱を水篤傳人といふ一少壯の日は如事

有りき文政十一年十月十二日信濃國諏訪郡
中津郷の農家を生むる為人隆準に「くろま
髯言談深甚温室可親幼時村塾より遊
戯小耽りて字よりを意とせきあり「ん字を業
其能て正しく文を綴るは自法阿る老人の奇
とある所を悦み嘗て魚好らむる傲むる備嘗
と字鞋を履て市小鬻ぬ高估たる店主のた
はきへしぬをを買よし「子作りもぬ人の
穿つら「適を以てあきと今を惜然と「

帰後うつま「に種屋の風はあり「みて、
そよそよとさくらを吹く海がけは古人の風情
を思ひ掃部の神「激し「多ぬと久ある
お福比乃伎留勢年と茶葉の好顔を思ひ「
ら文雅を以て身取まんとおもひさ「ぬれさか
恒の春をけれさか「のふり「と筆墨を高し「士
騷客の門けり出入をり舟人東慶子茶山正風
の宗匠なる「の其奇才は素と「俳諧の秘蘊を
あまて「まゝなまを傳へぬ古きを其生を自

三
ま情を勞す秋のけしきを案々多し名族近春樓
霞朝子能知遇を蒙りしも実ふはほれ事あり
と昔は是るを夜に燈火をかけし
見ぬ世は人を友とて泣き嘆息數に夜を徹し
るに造しぬ晩年に至るも於廢せしつゆふ是起の
癖を去るひも又人は東田城等して解蒙を得
きめしは如きもなきのしかり今案案と高業
乃たぬよ東武よりしてなきよ多しは風土と往來
し事回りの唾を招きも斯道入りて能

く物のほろを悟り遊玄の圃に耕を事其空地ふ
いありて風骨自ら借りぬくもて松樹能は能林り
物立してつゝ素堂居士は此を其の格調牙
正は總遠は後藝りし能遠は子能万杖なるも皆能
痛す能く能顔りて溜るも我能壇の宿契と
一洗を能く能きりみ士風は濟生能材を能き明
治の初年率先して俗を能くし歳里を能くし能
も可也の姿能那と能叫し能きり能契能公其
る能癖せし能勢か能く能く能て能ふし

通くともあらず其の故曰藩公樽姫の月光を愛して
望みも多留の沙前や流しし藤とつる句を得
たまふ随伴の人亦名に詩歌連俳あり居士を如
後輩に乞ひて帖とて字著る花を如く
同人の望深の吟詠をつりてと梓くつ白漱ふ
娘の當日も何事立回ひ免れ作事と如く不
禮也一は樽姫の名考りて事あり急高し居士
又中々兼れ病ありされと寄ぬ乃風産を厭ひて
つての大小を争ふを好まず菊りつる日数也年

の老るまを是陶潜の流大隠躬市の感あり
中々書画骨董を好む所蔵亦多し棟元
其傍彫刻を嗜みて彫家堪能の閑えあり然
しと餘暇おせは奇境陳迹を探りて園位首意
の杖すすのりて世を旅りてははむい々たる園ら
去り去り年の暮より仮初の病ふかす程まじり茶
亭をよし聖源磨のり杖を終て茶目如
須言つる侍りしふい多き意たなきて中
と稀とわつとつるめたるし何と事したるか

まきもれ語とせしむる身体を別ふ痛きも煩いし
起とこらもせぬけきと殊の外弱り半をこへおこひ
明のあも夜よは言へい多々眠りて死ん古昔願
まき書き日頃好め俳諧さへくも書きすはと書
つとてい半也は日と陰子に隣より白雲の西
へおこりけきふ書きもなくおあふとせぬ

秋の空の眼のつきそめて水は色の白いなりぬき
この小舎かつき感あきやぐいともやはの那きおあめの
まきむといのうも書き推鼓も書き来き又眼ふ

つまらぬ水のはらもいゆるんやいおあきある
おあき痛書成はとめて語りまひぬまきとや
祖の翁の終焉もかきとてむとまきと胸塞りて
終もい悲しぬぬ寐すち月といふお痛
て篇よるハ風雲の身はとめなをりれい重種て
まの書おの海をい漂泊をいけき海あり菊
乃科の河を移そ杖を東に離りしむきたまき
まてしぬまきおあきの袖を分ち作りた願后も
もたしとて送る九月八日といふり一筆の香も先

たまたま各海の極より悪くもまじぬと告越し
しるす猶々ささらけ地しを紅泪とめ難く也歎
ハ山中に四つをそえて九日近く終らまじも知死期
乃大禪と也いふ身ししを里を境の名を傳ふ
る限りなき追悼の句賦賦惜歎も且存をむ
み士生涯の夢おきまひ積る車に古ぼるる
かゝるふを其十の一を録するなり 過すに

明治甲午九月

探一雪人子識



花實集

初めは花はらふは土お人
我宿のおかきハ檐り雀か
お花のこゑも成るぬ花君
おこいしおのむらと店わら
あつちりしものも昔も
おのむらと店わら
おのむらと店わら

そよよあとの心製をさそふくさ
幾食を浅るるあ眼をうら

巖島

何れを舟長く親の心
地味りの心を長く親の果
果の世の軒の親をうら
余の心 伸あつたる長葉の
未檀ハもろ目たの七
の敷り西もあは舞

心はく入るる舞
花はあはるる心
我あはるる心

吉田中

ニとあははるる花の
朝市り中あはるる朝
心はあはるる心
こころあはるる心
信念の心あはるる心

松の葉をいりて煮て目もろくも
下毛りあはれし程に煮て
ちりちりあはれし程に煮て
あまみちりあはれし程に煮て
あまみちりあはれし程に煮て
あまみちりあはれし程に煮て

茶搦

茶搦の味
茶搦の味
茶搦の味
茶搦の味
茶搦の味
茶搦の味

抱き抱き今もあはれし程に煮て

廿七

とらとらあはれし程に煮て
あまみちりあはれし程に煮て
あまみちりあはれし程に煮て
あまみちりあはれし程に煮て
あまみちりあはれし程に煮て
あまみちりあはれし程に煮て
あまみちりあはれし程に煮て
あまみちりあはれし程に煮て
あまみちりあはれし程に煮て
あまみちりあはれし程に煮て

あつたしとあつたしとあつたし

哭麦家女士

花枝柳枝のあつたしとあつたし
あつたしとあつたしとあつたし
芭蕉のあつたしとあつたし

子規

あつたしとあつたしとあつたし
酒のあつたしとあつたしとあつたし
あつたしとあつたしとあつたし

あつたしとあつたしとあつたし
あつたしとあつたしとあつたし

子規

あつたしとあつたしとあつたし
あつたしとあつたしとあつたし
あつたしとあつたしとあつたし
あつたしとあつたしとあつたし

象浮

あつたしとあつたしとあつたし

誰とて掃くも道は入道なりを
綴りし心ありて茶火にさる宿
りし心も心方より宿水
我れ似て声の聲も幾許も
雅俗も心も心も心も心も
茶の心も心も心も心も心も
茶建の人とありて心も心も
心も心も心も心も心も心も

明治七年九月八日

追善之俳諧

良久

北の空舟眼より流るる水の色
入る月影も心も心も心も
床掛の蓮も破る心も心も
心も心も心も心も心も心も
心も心も心も心も心も心も
心も心も心も心も心も心も
心も心も心も心も心も心も

三九 茶香 北庫 瓶高 梅路 風鳴

堀の尻よとふをり筆
 加是
 朝霞の多き満の雲月の噴拂
 禎尚
 伸舌の乳出たるの如し
 頌以
 利ありさしぬ温泉の美し
 用休
 穂こころしむるあめのみ
 柳山
 大逆の罪をとりおぼるの比
 梅寮
 夕の霞とあまの成る時
 似水
 井戸の海に戸をのり屋敷に
 明京
 古銭體より一合とせよ
 楚山

月の名草飯好のおとこ
 菊明
 信濃のよきお物と書立
 三郎
 出世を告げぬるの禪の心
 屯山
 甲のくつゝの用の跡
 子文
 花のを筆をひり短くし
 凍湖
 地獄の火の中ぬるの如
 一物
 ちり酔ひの酔ふるの如
 知老
 昔の比舞の喧嘩をいふ
 隣雨
 賽り目よきし知事と
 截
 泉殘

神の御承おゆる
 空のつらさ 笙篳篥の音 太鼓
 八五居お位 配る衣
 振袖の裾 袂のあけ 配る衣
 文のつらさ 御承おゆる
 招の声 御承おゆる 風吹
 御承おゆる 御承おゆる
 御承おゆる 御承おゆる
 御承おゆる 御承おゆる
 御承おゆる 御承おゆる

御承おゆる 御承おゆる
 江鮭釣のつらさ 投る玉
 糊り利のつらさ 古給
 只のつらさ 一月の朝
 勇まのつらさ 御承おゆる
 木目玉のつらさ 補る板
 玉のつらさ 御承おゆる
 情のつらさ 御承おゆる
 用筆のつらさ 御承おゆる

花鳥

守所

抱湖

梅南

長盛

卯好

梅丸

具石

義碧

曾乐

小仙

菊女

羅城

根年

依山

珍莊

金谷

招眼

琥珀の如く河に月 招 嶺

翠の峰の如く 及 人

木偶の如く 代

西衆の如く 桐 蔭

花の如く 清 州

一 省 我

如く 執 筆

居士六齡六十二乃其年予乃行入堂之
はきとらつたつたつた越えんを彼山
守り小童十六ぬる此友とて山望る心
ありては 一 六十六その野をとり外
の世を 一 乃 一 其 一 生 一 年 一 乃 一 行 一 入 一 堂 一 之
志 一 乃 一 其 一 生 一 年 一 乃 一 行 一 入 一 堂 一 之
指 一 或 一 時 一 乃 一 埋 一 火 一 乃 一 其 一 志 一 乃 一 行 一 入 一 堂 一 之
神 一 乃 一 其 一 志 一 乃 一 行 一 入 一 堂 一 之
蹤 一 乃 一 其 一 志 一 乃 一 行 一 入 一 堂 一 之
と 一 乃 一 其 一 志 一 乃 一 行 一 入 一 堂 一 之
高 一 乃 一 其 一 志 一 乃 一 行 一 入 一 堂 一 之
遙 一 乃 一 其 一 志 一 乃 一 行 一 入 一 堂 一 之
一 乃 一 其 一 志 一 乃 一 行 一 入 一 堂 一 之
眼 一 乃 一 其 一 志 一 乃 一 行 一 入 一 堂 一 之
巡 一 乃 一 其 一 志 一 乃 一 行 一 入 一 堂 一 之
水 一 乃 一 其 一 志 一 乃 一 行 一 入 一 堂 一 之
の 一 乃 一 其 一 志 一 乃 一 行 一 入 一 堂 一 之
月 一 乃 一 其 一 志 一 乃 一 行 一 入 一 堂 一 之
東 京 一 乃 一 其 一 志 一 乃 一 行 一 入 一 堂 一 之
永 終 一 乃 一 其 一 志 一 乃 一 行 一 入 一 堂 一 之

湖をくぐりて入るにや
花の香も水の中へ
舞まき七人のしりよの色
こぼれゆく舞の影も
小あり
漁火の光も
むらさきの花も
りよの光も
末枯る

舟
千畝
採花
花
箭浦
彦雄
樹山
金羅
素水

夕陽の光も
葉の影も
舟の影も
色も
舟の影も

楸
楸
正義
柳
梅年

流るる水も
舟の影も
舟の影も
舟の影も

京都
柳
福原
大坂
南

耕雨 伊勢
 果樵 鳥羽
 蕙好 信濃
 真海 信濃
 曲川 石見
 梅我 也丹
 沙 尾張
 車友
 二道
 神 うを

杜 葎
 明 耕
 素 陽
 寄 陽
 荷 扇
 積 花
 遠 字 三河
 本 湖 遠江
 十 湖

至る所のりこまの蟻蟻 近江 九峰
 夜に成る蟻の道行を橋の上 美濃 外瀬
 星斗照る夜に垣り多の 藍庭
 河のほとりありの雲の影 括嶺 聖葉
 竹の 年をゆく 伊豆 蓮水
 空の香のありとありの 駿河 鳩堂
 塵の世の外にありの 那 吹水
 浮世をゆく花をよめる 了 抱情
 持訓一巻と書とありの 越後 本南

乙の心ありの 柳 晴雲
 細い心ありの 文色
 朝の汁の 花 花堂
 花の声ありの 陸奥 牡丹
 空の心ありの 南山
 空の心ありの 半水
 雨の星の清き 美濃 花旭
 田車ありの 加賀 南立
 徳ありの 戦を 吟外

世の憂き事多し
 小指 素之
 家田の切れ
 菫後 柳陰
 湖の水に
 下流 虫窓
 北の福狗
 上野 地高
 作の
 乙 瓢
 空の
 福壽
 甲斐 李山
 月
 運

昔の
 白隣
 竹良

之人
 竹凌
 雲光
 庭雨
 風儀
 竹遊
 對山

龍湖
 雲底
 龍湖
 世外
 一尺
 世高
 縣踐
 省踐

酒州
 桐溪
 南嶽
 魯山
 松舟
 令谷
 木人
 代
 水湖

如家
 小湖
 柳堤
 漁月
 松嶺
 希心
 大坂
 文仙
 凍湖
 行處

小仙
 依山
 似水
 義碧
 珍莊
 闲山
 湖邊
 松眠
 东我

入る花のついでにふさふさの
伸のふさふさの白梅のあはれ
花のふさふさの一枝のふさふさ
一の花のついでにふさふさ
虫のふさふさのついでにふさふさ
さのふさふさのついでにふさふさ
はのふさふさのついでにふさふさ
月をふさふさのついでにふさふさ
傾加補のふさふさのついでにふさふさ

物察
乃玉
松壽
花鳥
佳亭
梅甫
字所
抱湖
大分

花のついでにふさふさの
そこのついでにふさふさの
川をふさふさのついでにふさふさ
花のついでにふさふさの
葉のついでにふさふさの
花のついでにふさふさの
花のついでにふさふさの
花のついでにふさふさの
花のついでにふさふさの
花のついでにふさふさの

釣舟
梅高
田月
其石
松山
文水
月松
松橋
河川

子声
一志
集舟
能遊
為客
水音
磯雨
知夫
一梅

子声
一志
集舟
能遊
為客
水音
磯雨
知夫
一梅

若直
一物
可觀
有也
山
有舟
之類
對無
四好

若直
一物
可觀
有也
山
有舟
之類
對無
四好

新あふのふらふらとてはなほ梅の
菊の香をたぐひ誰の心入や
露の清き梅の花

其盛

楚山

屯山

訪ふ家々のつらさのこころ
菊の香をたぐひ世原

菊の

訪ふ

梅の香をたぐひ西の原の声

頌の

用休

泉の清き梅の花

泉の

梅の香をたぐひ牛車
を人

菊の香をたぐひ名札の香をたぐひ

岳の

梅の

梅の香をたぐひ竹の香をたぐひ

智の

梅の香をたぐひ成の海をたぐひ

甲の

行路の瘦と好のまじりぬ雨
 霧の根を刺して菊の白く
 那ふ人の影が流るる 菊の香
 作人のかげのまじりぬ
 里の知れぬ世のまじりぬ
 惜む程のまじりぬ 八月
 水雲のまじりぬ 南梅

と行

空のまじりぬ 海の空
 春のまじりぬ 風
 葉のまじりぬ 影
 露のまじりぬ 枝
 菊のまじりぬ 月
 都のまじりぬ 影
 霧のまじりぬ 影
 霧のまじりぬ 影
 大のまじりぬ 影

柳の葉は風に吹かれ夏
 吹上る中にも涼風が水に湧
 る音の響きも新しき音
 響く空を想はす
 本日の病を癒す
 友指の音も心ゆく
 流るる兄弟の心
 約束の地は花の友
 雨の音も
 我 久 我 久 我 久 我 久 我

春の風は心ゆく

兄弟の心ゆく

追記

去る冬は心ゆく
 春の風は心ゆく
 兄弟の心ゆく
 約束の地は花の友
 雨の音も
 我 久 我 久 我 久 我 久 我

東京
 招場
 指也

